# 中高生とともに差別と闘う

## 阿波木偶箱まわし

吉成タダシ（うずしおブランチ代表）

### 阿波木偶（でこ）箱まわし

先日、定期考査の午後を活用して、校内で人権教育研修を企画・開催しました。といっても、市内にある施設に出向き、フィールドワークや講演、実演をしていただくというものです。「実演？」と思われた方もおられるかもしれません。

みなさんは、人形浄瑠璃という芸能をご存じでしょうか。木偶を舞わせて物語を演じるものです。文楽と言った方がわかりやすいかもしれません。文楽は、一般的な人形浄瑠璃を芸術の域にまで高めた芸能ですが、それとは別の系譜を辿った「木偶まわし」の文化があります。

テレビやインターネットなどの娯楽がなかった時代、それは全国の家々や町を巡っては人々の穢れを祓い、清め、福を授ける、ありがたい門付け芸、祝福芸としての庶民文化でした。しかしそれも、高度経済成長にともなう文化の多様化で廃れていきます。と同時に、木偶をまわしていた人たちは、その家になくてはならなかった木偶、先祖代々引き継がれてきた思い出深い木偶を、手放すようになります。なかには、他人の手に渡るくらいなら、と近くの川に流した人もいました。なぜに大切な木偶を遠ざけようとしたのか。

そこに差別があったからでした。木偶をまわしているときは手をすり合わせてありがたがるのに、その一方で、木偶まわしの人々に対しては、蔑視の目を向ける。それを肌で感じていたからこそ、「子や孫に同じ思いはさせまい」と、先祖から引き継がれた木偶を遠ざけたのです。父母、祖父母、それ以前から大切に引き継がれてきた木偶。そんな家族同然の木偶を手放すときの心情。川に流そうとしたときの心情。その心情たるや如何ばかりだったでしょう。並々ならぬ決意や覚悟、悲哀があったのではと想像します。

そんな木偶を二つの木箱に入れて両天秤にし、全国をまわっていたので、「木偶箱まわし」。その拠点となるムラが、市内にありました。そして途切れかけたこの芸能を、全国で唯一残っていた師匠に弟子入りし、見事に復活させた女性二人がいました。その二人に実演していただき、保存会の会長さんに講演をしていただくという研修に参加した感想をもとに記してみたいと思います。

### 体験的な学習を

「昨今のコロナの影響もあり、自分自身久しぶりの研修に参加しましたが、改めて人とのつながりの大切さを感じました。

教員人生十九年の中で、人権教育のあり方も大きく変わってきているように感じています。そのなかで、今回、生で話を聞いて、生のものを見て、自分自身熱くなるものを感じさせてもらいました。リモートでの研修や資料を読むことも、時として効果のあるものではありますが、実物や実体験にふれることを改めて大切にしていきます。

そして、お話の中にありましたが、生徒の近くでいる立場だからこそ、大きい責任感を持って、生徒と語り合っていきます。今後ともどうぞよろしくお願い致します。（四〇代教員）」

新型コロナ禍となって以来、本当に生に接する機会が減りました。減ったというか、なくなったと言った方が正しいかもしれません。

彼の言うように、リモートも時によっては効果的なこともあるでしょう。でも、「熱」を伝えたいとき、やはりそれは、「生」に触れることなのだと思います。目で見て頭で考えるだけではない、匂いだったり、音だったり、空気感だったり、ときには味わいだったり。子どもの頃の美味しかった食の記憶なんか、いつまで経っても残ってたりしませんか？

以前のようにはいかないかもしれませんが、やっぱりどこかの場面では、体験的な学習ができていければと思います。私たち大人にとっても。

### 音楽科だからこそ

「初めて木偶箱まわしを拝見し、独特の世界観に見とれてしまいました。私は音楽を教えているので、浄瑠璃を鑑賞分野で取り扱う際に、浄瑠璃や木偶箱まわしの文化や歴史について伝え、考える機会を作ろうと思います。身近にある伝統文化や音楽を子どもたちに伝えていける立場であるので、自分自身が学んだうえで、授業に生かしていきたいです。

今回の研修に参加し、最も大きな気づきは、自分が部落差別についてまったく知らない存在であるということでした。今後はまず、知ることから始めていき、自分自身と向き合うことで、人権感覚を磨いていきたいです。そして、日常生活の中であふれている人権問題に直面したとき、自分の信念を持って行動できる人でありたいです。（二〇代教員）」

教科によっては、その特性上ダイレクトに伝えられることもあるんだな、と読んでいてつくづく感じました。よく知らなければ触れもしないようなことも、知っていれば「熱」を込めて伝えることができる。この二者にある違いは本当に大きいものでしょう。子どもたちにとっても、頭だけで観念的に知るのではなく、胸に迫ってくるように伝わってくる方が、残りやすいと言えます。私たちが目指してきたのは、そもそもそういう学びでした。

今回、教職員の感想を読んでいてつくづく、フィールドワーク（実地研修）の必要性と意義を感じました。確かに私自身もそうです。前号でお届けした豊島についてもそうですが、やはり現場に行き、当事者から直接話を聞くことにどれだけ大きなインパクトがあるか。そこで刻まれたことが胸に残り、自分の芯となっていくように感じられます。

次号も感想をもとに記していきたいと思います。



イラスト　中島　亜唯